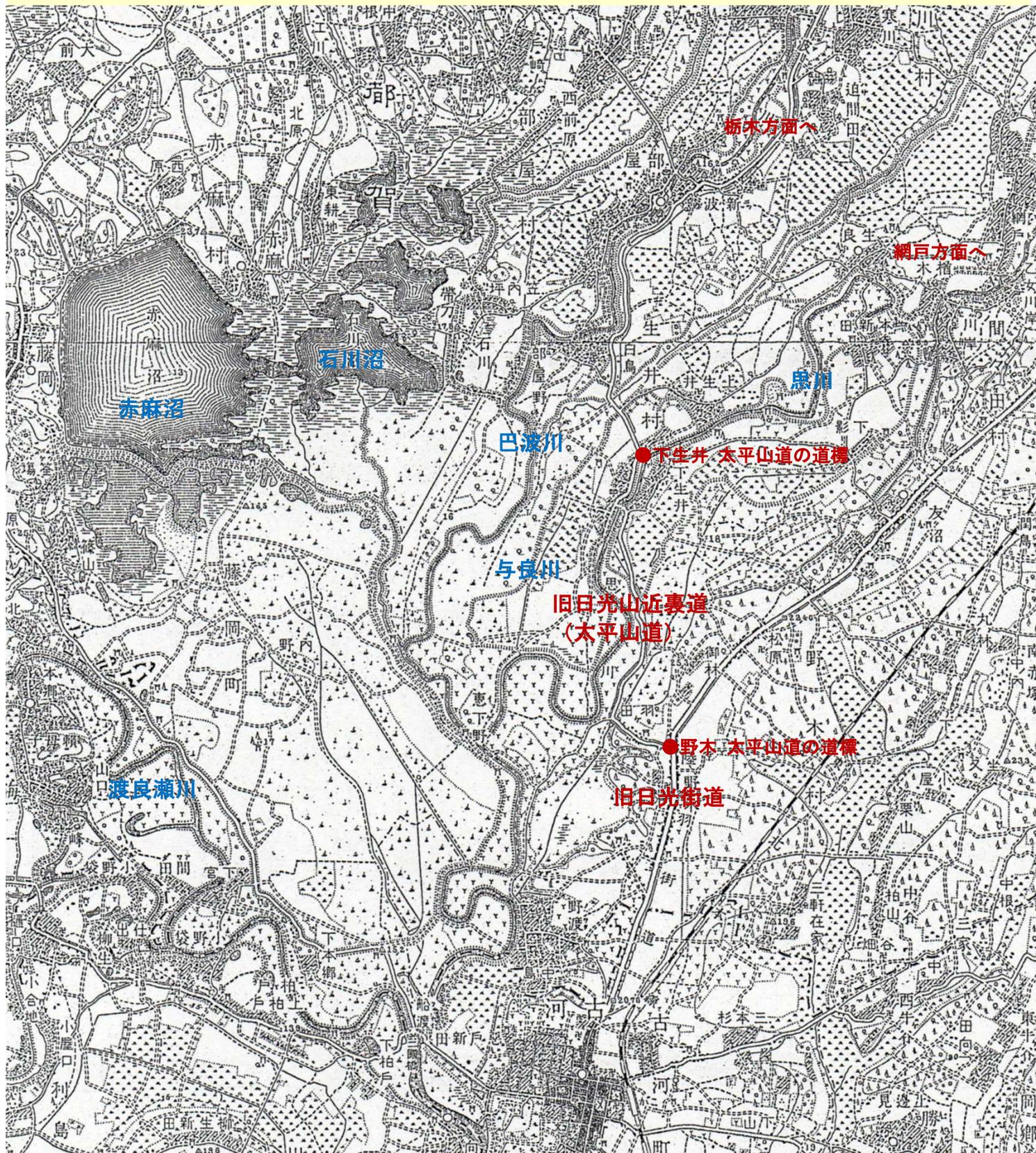
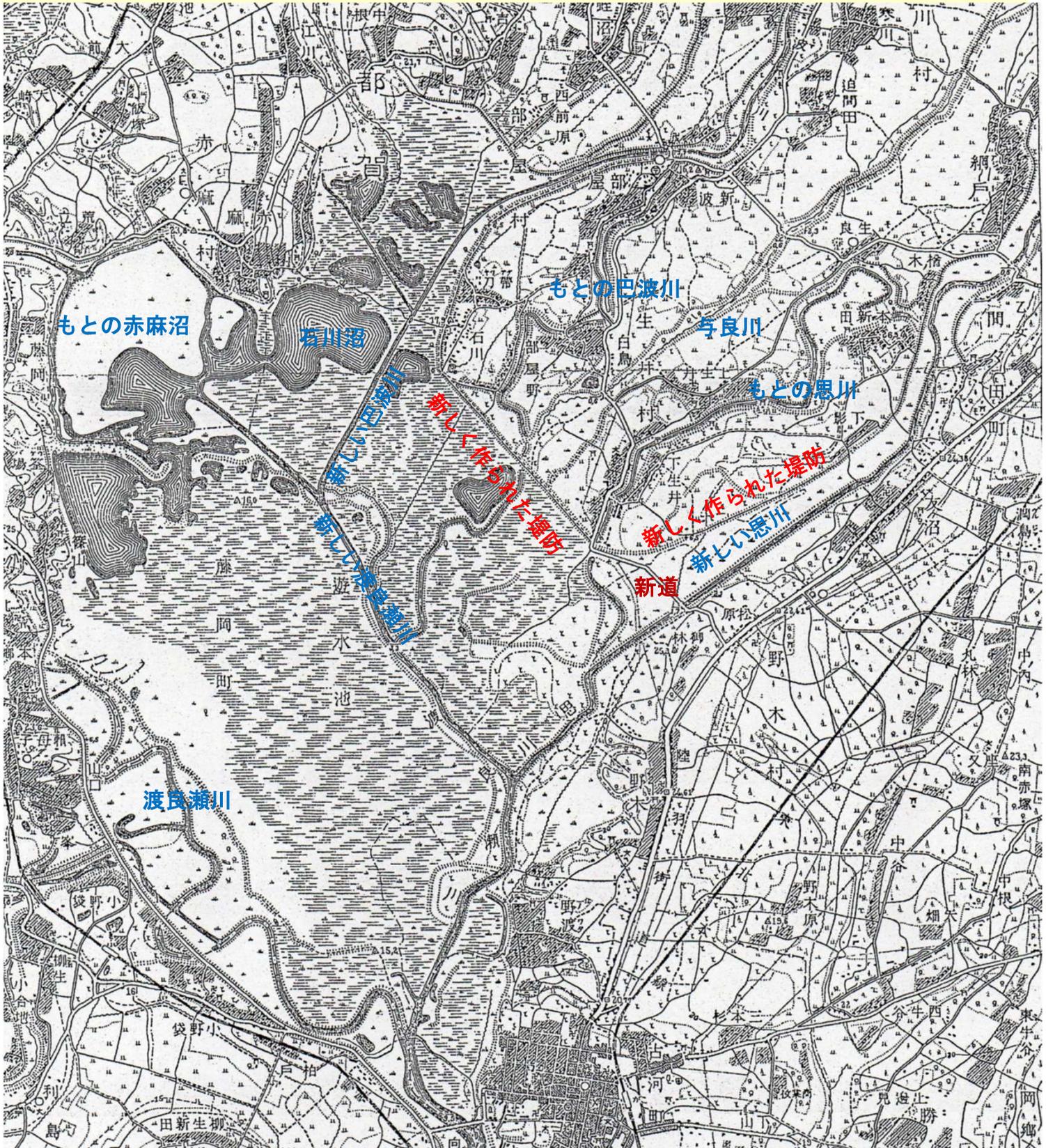


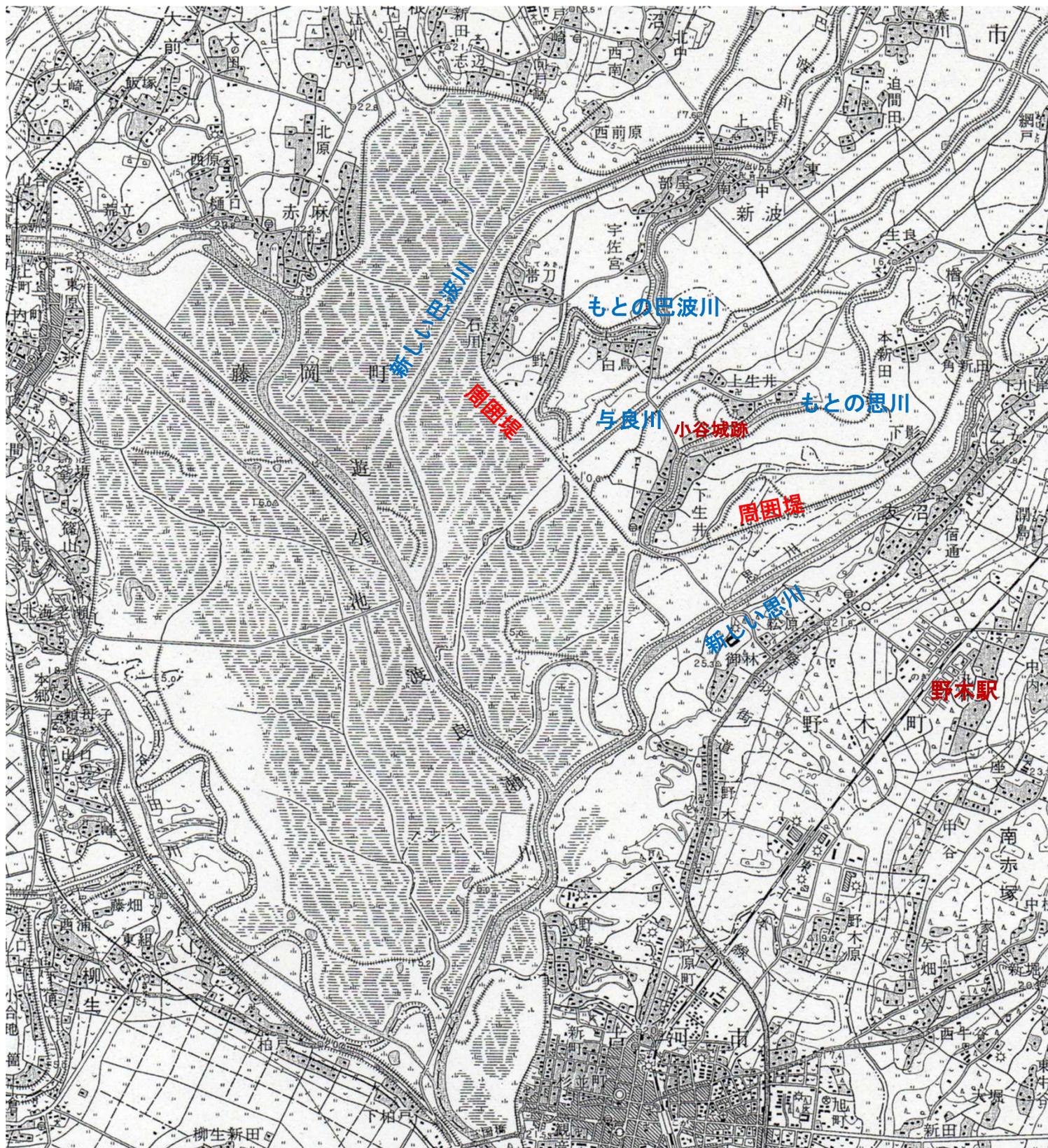
この地域を表した最初の5万分の1地形図です。明治22年（1889年）の町村制施行により「生井村」が誕生し、地区内の大字である「上生井」「下生井」「白鳥」の各集落の文字も見えます。この地形図が作成された時期は、足尾鉍毒事件に伴う渡良瀬遊水地や利根川水系の河川改修計画が具体化する以前であり、思川や巴波川、与良川など地区内を流れる河川の流路がかなり蛇行していたことと、各河川の自然堤防上に集落が発達したのがわかります。当時の生井地区の土地利用を見ると現在と比べて水田が少なく桑畑が比較的多いことがわかります。これは、かつて養蚕業がさかんだったことを裏付けるものです。また、当時の道路は、江戸時代もしくはそれ以前からのものが多く見られ、地図に表記された「陸羽街道」（江戸時代の日光街道、現在の国道4号線）の野木から思川・巴波川沿いに北上する道路（江戸時代の脇街道「日光山近裏道」＝通称太平山道）と網戸方面から思川沿いに伸びる道路が生井地区の主要道路だったようです。



明治時代末期に計画され、大正時代に入って具体的な工事が始まった利根川水系の治水事業が進み、現在ある周囲堤のもととなる生井地区や西隣の栃木市（旧藤岡町）部屋地区などの集落を取り囲むように長大な堤防や、河川改修によって新しく直線的な流路に付け変わった思川や巴波川の様子が読み取れます。かつて遊水池の西側を流れていた渡良瀬川の流路は藤岡台地を開削して遊水池の中を通るようになりました。また、陸羽街道から生井村へ通じていた主要道路が、浸水の恐れがある遊水池内を通らずに迂回するように、それまでの野木からではなく、その先の松原から分岐し、新しい思川を松原橋で渡る新道ができました。広域的に見ると、赤麻沼の文字が消えて沼地が干し上がり、広大な遊水池が出現するとともに、かつて遊水池内にあった旧谷中村の集落が消えていることがわかります。遊水池の西側には昭和初期に開業した東武鉄道日光線の線路も描かれています。



地図上での横文字の表記が右からの読みから左からの読みに変更となりました。遊水池内にあった大小の沼地のほとんどが姿を消しました。旧思川の様子をみると、榑木から生良にかけては、水量がなくなり、旧河道として描かれています。幹線道路では、陸羽街道から国道4号が主表記となりました。地形図の表現が変わり、堤防や土塁などの盛土部分のラインが目立つようになりました。このため、思川と巴波川と遊水池に囲まれた地域がすっぽりと巨大な周囲堤内に収まっていることが読み取れます。旧思川の西側、上生井と下生井との間には、円形の土塁に囲まれた中世の城跡である小谷城跡も読み取れます。なお、野木は村から町に昇格し、東北本線に野木駅も新設されました。思川には、観晃橋に続いて、小山市内で2番目の永久橋となる乙女大橋が架橋され、思川下流域での増水時にも通行できるようになりました。



遊水池内には第1・第2・第3の3つの調節池を仕切る圍繞堤（いぎょうてい）と、増水した河川の水を一時的に調節池に引き込み、水位を下げて下流域の洪水を防ぐための越流堤（えつりゅうてい）が造られ、渡良瀬貯水池（谷中湖）も造られました。昭和40年代後半からの土地改良・耕地整理事業により、生井地区の田畑は直線で区切られるようになりました。また、思川には新たに松原大橋が架橋され、生井地区と国道4号線・野木駅方面とを結ぶ利便性が向上し、カーブが多く幅員の狭かった県道のバイパスや広域農道も開通しています。土地利用では、桑畑は完全に姿を消し、ほとんどが水田化されたことがわかります。また、檜木から上生井にかけての旧思川の流路は直線的な用水路と水田になり、旧河道であったことも判読できなくなりました。野木駅周辺の市街地化がかなり進んできたこともわかります。

この地形図から、多目的利用の観点に立ち、「遊水池」の表記が「遊水地」に変わりました。

